

〔茶道便蒙抄客方〕雪隠之事

雪隠は石を居、砂を入る。是壺ツにて古は用といへども、當代は是を小便所と號し、中廬地に下腹雪隠とて、かめを居ふみ板を敷、是には大調ふ、尤まかるべし。されども侘は砂雪隠壺ツならではなし。此時大用は調間敷か、砂雪隠に大用調様口傳、

〔茶傳集 十二〕雪隠ニ付、針屋宗春方にて、戸田民部、熊谷半次、奈良や三助、此三人客に而茶の湯ありしが、夜會にて夕さり申の下り露地入、宗春も雪陰の内能見て迎に出しなり、中立ノ時、三助雪陰を見るに、大の男一人壁に添て立テ居ル、三助誰人と問上客二客は通り過て、腰掛に行三助に申は、豊島大之進と云兵法者也、今日ノ客中ノ内戸田民部正に遺恨ノ者也、一刀うらみ候心也、民部を是へ引出給へと云、今日ノ茶會に刃物ザンマイ無用宿意あらば重而打べし、從是逃去ば一命を助くべしと云、大音にの、まじ候故、二客何事かと立出ル、早くも三助心得、民部に怪我有ては詰ノ役不濟と、小脇差をぬく手も不爲見、大之進を雪陰外方内へ入レ、突留、夫々兩人被入露地、行燈に而能々見候へば、民部見知有物也、甘グ間もなく後入して茶濟御露地ノ御便所を穢し候由、挨拶して、シカ／＼と申候へば、宗春驚申、又三助は武士ニ取立、戸田三助と爲名乗、法體して三人と成、甲斐々々敷町人也、夫々して曉會夜會は亭主も入念雪陰を改め、客も能々見る事也と仰川三齋也。

〔茶傳集 十三〕一下腹雪陰とて外露地に仕置事也、雪陰の内ノ壺はかめを居へ申候、又桶にても吉ふみ板を置、跡には小砂を置かけて、砂かきを立掛て可置、内露地の如く石を居へ、砂利を付る事なし、奇麗に候では入られざるものなり、

〔茶道筌蹄 一〕庭之部

石手水鉢 杉の杓長柄

水溜さし渡し七寸深サ 六寸程、尤石の大小にもよる、利休所持の四方佛